

まあむかし、あっただげな

むかし、あるところに、のんびりした男の子がいました。男の子は、お店で働くことになりました。

旦那^{だんな}さんが、男の子に、

「今日は、お茶^{ちや}と、くりと、柿^{かき}と、麩^ふを売っておいで」といって、町へ売りに行かせました。

男の子は、品物^{しなもの}のかごをかついで、大きな声で、

「茶くり柿麩、茶くり柿麩」といいながら歩きました。けれども、だれも買ってくれませんでした。晩^{ばん}がたまで売り歩きましたが、ひとつも売れませんでした。

男の子は、帰って来て旦那さんに、

「あのう、売りに行きましたけど、ひとつも売れませんでした」といいました。旦那さんは、

「おまえ、なんといつて売り歩いたんだ」とききました。

『茶くり柿麩、茶くり柿麩』といつて歩きました」

「おまえ、そんな何もかもいっしょにいつても、何のことか分からん。それでは売れるはずがない。茶は茶、くりはくりと、みんな別^{べつ}にいつて売ってこい」

「わかりました。それなら、こんどは、別にいつて売ります」

つぎの日、男の子は、またかごをかついで町に行きました。そして、大きな声で、

「茶別、くり別、柿別、麩別」といつて売り歩きました。一日じゅう、

「茶別、くり別、柿別、麩別」といいながら歩きましたが、やっぱりひとつも売れませんでした。

男の子は、帰って来て旦那さんに、

「あのう、今日もまた、ひとつも売れませんでした」といいました。

「おまえ、なんといつて売り歩いたんだ」

『茶別、くり別、柿別、麩別』といつて歩きました」

「それはだめだ。もっとよくわかるように、別々にいわないと、だれも買わないよ」
「わかりました。それならこんどは、別々に売ります」

そのつぎの日、男の子は、またかごをかついで売りに出かけました。そして大きな声で、

「茶は茶で別々、くりはくりで別々、柿は柿で別々、麩は麩で別々」といつて歩きました。一生けんめい、

「茶は茶で別々、くりはくりで別々、柿は柿で別々、麩は麩で別々」と売り歩きました。

けれども、やっぱりその日もひとつも売れませんでしたとさ。

それがまあ、むかしのたねくさり

村上郁再話

資料『丹後伊根の昔話』京都府総合資料館